
宇宙戦艦ヤマト ~地球を愛した少女~

沖田五十六

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宇宙戦艦ヤマト～地球を愛した少女～

【Zコード】

Z0251M

【作者名】

沖田五十六

【あらすじ】

西暦2203年、惑星アクリアスから大量の水が地球に向かっていた。

それを防ぐべく、自らのみを呈して、一隻の宇宙戦艦が自爆した。この作品が、自分の初投稿作品です。楽しんでいただけたらうれしいです。

ヤマト。お前はこの星、地球を救えて満足だったのか？

俺は、お前のことがずっと

宇宙戦艦ヤマト 艦橋

惑星アクエリアス。この星は、水が地表をすべて覆っている。他には浮遊大陸の他に何もなかった。

この星で、唯一、人が存在しているこの艦 宇宙戦艦ヤマトにトリチウムが艦載されていく。この物質で地球を救えるらしいが、その代償として『彼女』が犠牲になってしまつ。なんで『彼女』が犠牲にならないといけないんだ

「扶桑戦闘副班長、トリチウムの艦載終了しました・・・」
最上甲板で作業していた隊員が俺 扶桑良介に報告してきた。

「・・・」苦労だった。

今の自分が言えるのは、これが限界だった
自分の隣にいる200年前の日本の軍服を着ている人。いや、少女は顔を俯かしていた。

この少女は人ではない。艦魂 船に宿る魂 である。艦魂は、船が生まれると同時に生まれ、船が沈む時には船と共に死んでいく。彼女もその一人だ。

「・・・ヤマト・・・すまないな・・・」

彼女 ヤマトは顔を俯かしたままだった。

「・・・扶桑さんが謝る事じやありません。むしろ、地球を救えるなら本望です。」

顔を上げながらそう言つた彼女の顔は少し悲しげな顔だった。

「ただ、1つだけ心残りがあります。それは・・・」

「・・・ムサシの事か・・・」

ムサシとは、この宇宙戦艦ヤマトの2番艦の事だ。その艦の艦魂はヤマトの妹であり、ただ一人の家族である。

「それもあります。けど、それではないんです。」

ヤマトは、少し頬を赤めさせていった。

「それは・・あ「アクエリアス、土星軌道まで約2時間。地球まであと5時間で接近します。急いでください！！」

航海員の言葉に遮られ、聞こえなかつたが、そんなこと気にしている暇はなかつた。

数分後、ヤマトはアクエリアスの大気圏外に出て、地球に向かって出発した。

「！前方、正体不明の敵艦隊。メインパネルに切り替えます。」レーダーを操作していた森雪が言つた。

「あれは・・ムガール大總統が脱出した宇宙船だ。」

戦闘班隊長、古代進が気が付いた。

「総員戦闘戦闘配置につ！」待て！ヤマトはトリチウムを満載しているんだ！動く水爆のようなものだ！一発でも敵の砲弾が命中したら一溜まりもないぞ！交戦はせず、一刻も早くワープのチャンスを探すんだ！」

ヤマト艦長、沖田十三が貫禄のある声で命令した。

「はい！ワープ準備、急げ！」

古代の右隣、本当は航海長が座るべき場所に扶桑は座つていた。

「ヤマト、心配するな。きっと敵艦隊を突破できる。」

「わかつてます。けど・・・」

ヤマトの体が震えている。これまで戦つてきた中で、今、一番恐怖を感じているのである。 「大丈夫、俺が付いているからには、絶対死なせはしない！」

「扶桑さん・・・」

そうしている間にも、敵艦隊はどんどんヤマトに近寄つてくる。

「敵ミサイル、発射体制に入りました！」

雪の悲鳴に近い声が聞こえ、2人はメインパネルを見上げた。

「だめだ・・もう間に合わない・・・」

古代の諦めた声が近くで聞こえた。しかしその数秒後、敵艦隊の一角が爆発した。

「見ろ、あれは『デスラー艦だ！』

メインパネルにデスラーの姿が映し出された。

「デスラー、無事だつたのか。」

「ああ、たまたま星間国境の巡視に出かけていてな。その節は失礼した。一言礼を言いたくてね。間に合ってよかつた。地球の状況は知つてている。あの邪魔者は私が引き受けよう。」

古代以外の人は唖然としていた。

「古代、何をしている。早く行け！」

そして、ガミラス艦隊の攻撃により、敵艦隊は撃滅された。

地球近くの宙域

ヤマト乗組員の総員離艦が進む中、扶桑とヤマトは戦闘機格納庫に通じる道を進んでいた。

「・・・これで、ヤマトとはお別れだな・・・」

ヤマトは無言のままだった。

「ヤマト、俺はどうしたらいい？このままここに残つていた方がいいのか？それともフュツキに乗つて、生き残るべきなのか？」

扶桑は、沖田艦長がヤマトと共に死ぬ気でいるのは知つている。ついさっき、ヤマトから告げられた。

「・・・それは、生き残つてほしいですよ。だつてあなたは、私が生まれ変わつた日から一緒に過ごしてきた人なんですから。それに・・・」

「それに？」

ヤマトの頬がりんごの様に真つ赤になつっていく。

「扶桑さん、いえ、良介さん。私はあなたの方が大好きです。だから、生き残つて地球で幸せに暮らして下さい。これが、私の最期

の望みです。」「

「・・・・・ヤマト・・・」

今にも泣きそうな顔を必死で笑顔にしていた。

「さあ、行つて下さい。私は、地球をして、愛するあなたの未来を守るため、死に行きます。」

しばらく沈黙した後、扶桑がヤマトの肩を抱き寄せた。

「ヤマト・・・俺は・・俺つてやつは・・・」

いつの間にか、扶桑の目から大粒の涙が流れ落ちた。

「良介さん。泣かないで下さい。さあ早くフコッキに移つてくれださい。」

「ヤマト、俺からの最後のプレゼントだ。」

そつと、ヤマトの脣に自分のそれをくつつけた。そしてそれを離すと、同時に戦闘機格納庫へと走り去つていった。

「さよなら、良介さん・・・・」

そして、ヤマトは生きては帰られない攻撃をし、アクエリアスの海へと消えていった。

あの時、なぜ俺はさよならを言わなかつたのか、正直後悔している。あの後、フコッキに乗り移つた俺は、ヤマトの最期を見ずに地球へ帰つてきた。そして今、彼女とヤマト乗組員の戦士の塔の前にいる。「ヤマト。お前はこの星、地球を救えて満足だつたのか？」

東京の小高い丘の上に作られた塔の前で思わずそう言つた。

「はい。」

後ろから声が聞こえた。一瞬幻聴かと思つたが、後ろを振り返つたとき、その考えは消えた。

そこにいたのは

「ただいま、良介さん」

紛れもない、彼女だつた。

（後書き）

いかがでしたか？感想またはアドバイスをお願いします。
設定では、宇宙戦艦ヤマトの同型艦のムサシがいることにしています。
す。が、出てきこないのでご了承お願いします。

それと、次回の投稿は未定ですので、リクエストがある場合は感想
に書いてください。それではこれで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0251m/>

宇宙戦艦ヤマト～地球を愛した少女～

2010年10月10日03時17分発行